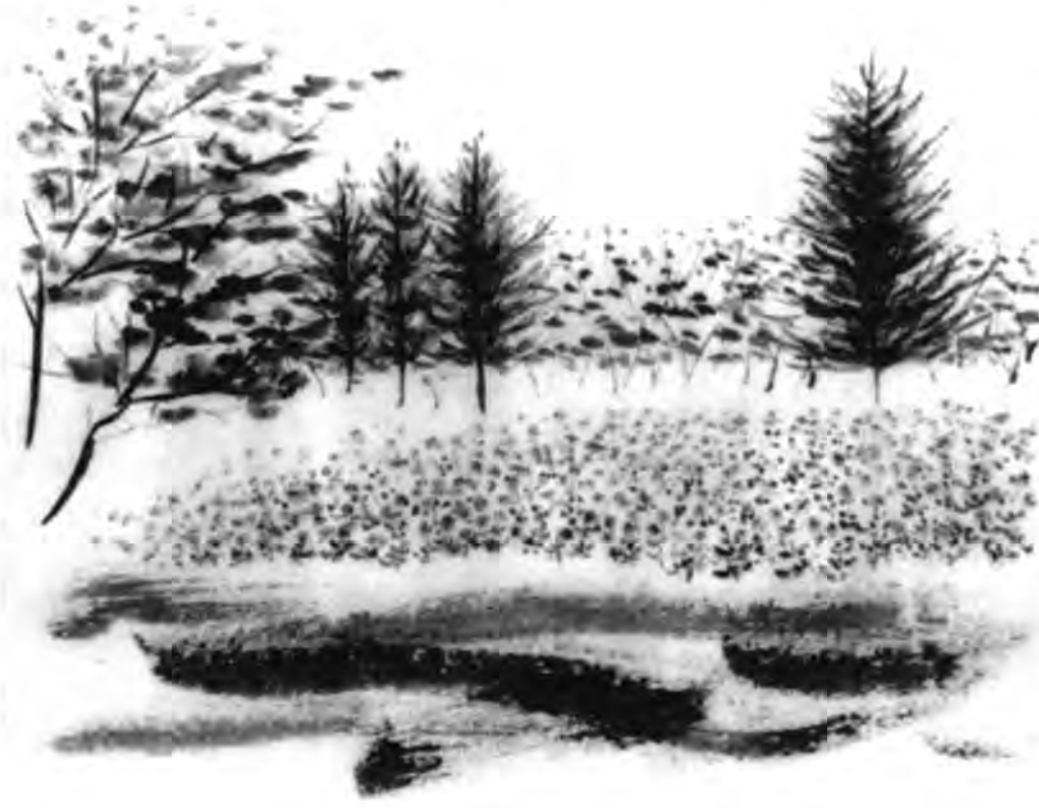




王禅寺「化粧面谷公園」

紅花を回想して



王禅寺地区の古くからの集落に、伝統を伝える人達がいる。正月や祭り、地域の行事が近づくと、お囃子の笛や太鼓の音が聞こえてくる。この地域は、今でも貴重な自然が残されている。王禅寺の古利を中心に、隣接して神社や公園があり、裏門坂を北に進むと王禅寺中央小学校、王禅寺中央中学校が見えてくる。そこから住宅地に入ると、右に籠口の池、左に行くと車道突き当りに、緑豊かで静かな公園がある。そこには、くねくねしたスベリ台や犬の形をしたベンチ、丸太の椅子などが設置されていて憩いの場となっている。この公園は「化粧面谷公園」と云う。古く江戸時代の王禅寺村の様子を伝える宝暦十二(二七六二)年の地図には、この場所は「けわいめん谷」と書かれている。この「けわいめん」は「けしょうめん」のことで、この地域には、紅花や白ゆりが群生していたと伝えられる。

江戸時代王禅寺村や隣接の村々は、二代將軍徳川秀忠の夫人である「お江与の方」のお化粧領地であり、年貢を納めている。寛永五(二六二八)年の古文書には年貢米の代わりに、紅花四斗四升七合を納めたとあり、やはりこの化粧面谷公園周辺には、紅花が群生していたのではないかと推測される。今は無い紅花ですが、公園の背景を前に咲かせました。

「紅花は、キク科の二年草、エジプト原産で、古くから口紅、食紅などの染料としてきたが、現在は、主に切り花として栽培されている。茎はまっすぐ立ち、高さはメートルほどになる。葉は楕円形でかたく、ふちは鋭いトゲのようになっている。花はアサミに似た頭状花をつけ、はじめは鮮黄色で、のちに赤色に変わる。」

絵と文 志村幸男

からむし六十六号の
ラインナップをご紹介します

P1 麻生区の風物紹介

今号は志村幸男さんによる「王禅寺化粧面谷公園」紅花を回想して。江戸時代王禅寺村はお江与の方のお化粧領地で年貢を納めていたとか。

P2 前市民館長 三枝正孝さん

三年にわたり麻生市民館の館長を務めた三枝さんが定年退職されました。去るにあたっての二言を寄稿して頂きました。

P3 あたらしい風 プレルーディオ 石井郁朗さんが語る

昭和音大の関連企業であるプレルーディオ、カルツツの運営も担っておられ、川崎の文化振興に貢献しておられます。

P4 「琴と私」谷川みゆきさん

お琴の先生で、夏休み親子教室でも講師として貢献いただいている谷川さんの話です。

P5 「カメラと人生」千坂隆男さん

永年にわたり写真のリーダーを務めた千坂さんの話です。

P6 「喫茶文化で識る世界の歴史」平本一雄さん

文化講演会の講演記録です。

P7 「受賞者紹介」

今年度総会での受賞者の紹介と、第三十五回かわさき市民芸術祭の報告です。

P8 文化協会報告と予告

二〇一九年度総会の記録、アルテリッカ新ゆり美術展の報告と、今後の予告です。

麻生区文化協会への感謝と期待

麻生市民館 前館長 三枝正孝



麻生区文化協会への感謝と期待

このたび、私事ではございますが川崎市役所を定年退職となり、平成二十八年（2016年）度から三年間の麻生市民館長としての任も終了いたしました。その間麻生区文化協会の皆様には、市民館への貢献だけでなく、私自身にとりましても皆様とお付き合いを通して多くのことを学ばせていただきました。今回「からむし」の執筆の機会をいただきましたので、麻生区文化協会の三十年間を超える歴史と比べるとごく短い期間の経験で分不相応とは存じますが、私から見た麻生区文化協会について述べさせていただきます。

麻生区の文化を支える

麻生区文化協会は美術、工芸、俳句、芸能等、文字通り多岐にわたる文化活動によりまして、麻生区全体の文化の普及に多大な貢献をさせていただいております。さらに様々な事業を通じ伝統文化の継承にも大きな力を発揮いただいております。麻生区文化協会の活動の中でも私にとりて印象の大きい取組については次のとおりです。

① 正月の風物詩として定着した

「あさお古風七草粥」

食という切り口で季節感、地域性を多くの方に体験してもらおうという点で「あさお古風七草粥」は特筆すべきものだと思います。地元で摘んだ七草や収穫したお米を使うという本格的な準備作業を経て、例年約千人の来場者にお粥がふるまわれます。事前の準備から当日の開催業務まで目の回るような忙しさにもかかわらず、皆様が生き生きとして活動されている姿が印象的でした。その姿勢は参加された市民の皆様にも十分伝わって会場全体にお正月の晴れやかな景色を生み出していました。また、お囃子、獅子舞、正月あそびの体験等でも賑わいが演出され、伝統的なお正月の姿を継承するという点でも貴重な事業となっております。冷たく澄んだ空気の中でのこの催しは、私自身にとりても引き締まった気持ちで年の始まりを迎えさせてくれる風物詩でした。

② 子どもたちへの文化普及としての

「夏休み親子教室」

子どものうちから文化芸術に親しめるような書道、絵画、科学など様々な分野について幅広い世代への文化の普及、啓発に大変効果的な取組となっております。学校の授業と違い、評価などを気にせず

自由な発想で学べることが大きな利点だと思います。毎年この教室が開催されている時期の館内は明るく活気のある雰囲気になっていきます。市民館としても若い世代にも学びの場として利用いただきたいと考えておりますので、この教室には大変感謝しております。

③ 麻生区の風景文化と俳句大会

この大会には毎年五百句前後の応募があり、改めて麻生区は俳句の文化が普及しているとの印象を受けました。さらに文化・歴史遺産、里山等題材となる風景等が区内各所に豊富に存在している区の特徴も影響しているのかもしれない。館長として俳句大会の選者をお受けし、俳句にはあまり縁のなかった私ですが、これを機に俳句の奥深さを感じ、俳句をたしなんでいる方には日常の何気ない風景もより感動的に美しく見えているのではと思うようになりました。さらに、選句の中で共感を得られる句に出会えた時はその作者と気持ちがあつたような感覚に嬉しくもなりました。

麻生区文化協会の市民力

協会の皆様はそれぞれの分野で深い造詣と経験を持ち、その活動に打ち込

みながら、文化振興を担っているという自負も感じられます。特に各種事業においても自ら動き方を惜しまない姿勢はすばらしいと思います。例えば俳句大会に例年多数の応募があるのも長年の地道な啓発、学習活動の成果ではないかと思えます。

また、絵画、俳句等の芸術活動はある面では個人的な活動の側面を持つているかもしれませんが、協会の存在は活動している人々を結びつける働きがあります。同じ分野で活動している方々同士の間には切磋琢磨はもちろんのこと、違う分野の文化活動に触れ合うことでお互いの刺激となる効果もあるのではないのでしょうか。

館長になつて得られたもの

館長として麻生区文化協会の活動にご協力させていただくことで、文化芸術活動に接する機会を沢山いただきお陰様で私自身の視野が広がったと思います。例えば、俳句大会での選者の経験は、なかなか勉強での対応ではございまして、表記された文字以上の解釈、感動を伝えることができる日本語の素晴らしさを改めて認識できました。麻生区文化祭で邦楽の演奏を聴く機会をいただいた時は、音色だけでなくその演奏の姿も体となった芸術なのだということを私流に解釈させていただきました。そしてこうした体験により、文化は人々が繋がりが行動するエネルギーにもなる実感いたしました。

麻生区文化協会への期待

麻生区文化協会の皆様には麻生区の文化活動の中核を担い、それぞれの分野における高い水準を維持しながら、今後も文化活動や様々な事業を通じて多くの方へ文化芸術活動の楽しみや素晴らしさを普及していただけると期待しております。例えば普及にあたりましては皆様が講師として地域の要請に基づき出向くことも考えられます。既にそのような活動をされている方もいらっしゃるかもしれませんが、協会として町内会等の地域団体とお互いにネットワークのある関係性が築ければ活動の幅が広がると思います。昨今注目されている地域コミュニティという点でも協会の活動が区民の一体感や相互理解を生み出すきっかけとなるかもしれません。

以上是我的解釈の範囲内でのご提案でございますので、このような見解もあるのだなという程度にお聞き留めただけは幸いです。そもそも、私からこのようなことをご提案するまでもないという気持ちもございまして。それは、菅原会長が日頃から「新しい風と創造」を提唱されており、変化を厭わず次の時代に向け新しいものを生み出していく気概を強く感じられるからでございます。これからも麻生区文化協会の皆様がいままで健康で生き生きと活動していただけることが麻生区の文化と市民生活の活力になっていくと私自身期待しているところでございます。

麻生区文化協会への新しい風

「株式会社プレルーディオ」

大学資産を活かした卒業生支援と地域の文化芸術のまちづくり

代表取締役社長 石井郁朗

プレルーディオは、平成十四年三月に昭和音楽大学と同窓会組織の出資により、有望な若手のアーティストを積極的に支援するために麻生区にて設立されました。音楽大学を卒業し、海外留学を経験した有望な若手のアーティストであっても、すぐに活躍の機会を得る事は非常に困難です。プレルーディオでは、そうした有望な若手アーティストが、大学の音楽教育を通じて培った専門性を社会に示し、プロとして演奏活動の第二歩を踏み出せるよう、様々な演奏機会の創出を積極的に行っています。また地域とのコミュニケーションを図りながら各種公演の企画から、演奏会の音響・照明等舞台技術を含めた公演制作に加えて、劇場・ホールの管理運営を行うと共に、音楽だけでなく舞台芸術全般を通じた彩りのある豊かな社会作りへの貢献を目指しております。

ここ麻生区では、特に十年前の二〇〇九年に始まったアルテリッカしんゆりにおいては、麻生区文化協会主催のアルテリッカしんゆり美術展を皮切り

に、弊社は初回から、昭和音楽大学と協力しながら学生卒業生等が出演する公演の制作舞台技術を毎年担い、広報チケット販売等でもお手伝いをさせて頂いております。

この他にプレルーディオ主催として、昭和音楽大学卒業生の若手アーティストによる定期コンサート「Showaミュージックカフェ」は、低価格（小学生は無料）でより多くの方に有望な若手アーティストを知っていただくと共に、上質な音楽鑑賞の場を提供するために、昭和音楽大学のコンサートホール「ユリホール」で開催しています。更に、地域の方々が一緒に参加して行う企画としてオペラ歌手と童謡・唱歌・叙情歌を一緒に歌う「日本の名曲を歌う会」



二〇二二年には「しんゆり・芸術のまちづくり」フォーラムのイメージアーティストに選ばれました。韓国からの留学生でメジャーデビューした歌姫Jisongのマネージメントを行って参りました。その後も、アルテリッカやイルミネーションイベントのKirara@アートしんゆりの点灯式等、麻生区内のイベントでも多くの昭和音楽大学の学生・卒業生の演奏や、藤原歌劇団の男声ヴォーカルユニット「クアットロアリア」等のコンサートには麻生区文化協会所属の童謡をうた

や五十歳以上の音楽愛好家による「おとなのコンサート」などを実施しています。



また、今年アルテリッカでは、五月四日に「クアットロアリアスプリングコンサート」二〇一九（同ユリホール）に桐光学園合唱部との初共演にも注目です。五月六日（十時&十二時十分の二回公演）には子供向け公演として「〇歳からのコンサート〜みんな大好き！

食べ物のうた大特集！パートII」を昨年同様新百合21ホールにて行います。

また、麻生区内ではモントルージャズフェスティバルジャパン・イン・かわさき、かわさきジャズに先駆けて川崎市アートセンターにて「しんゆりジャズスクエア」を（株）エリアブレインとプレルーディオの共催で開催しております。

昭和音楽大学は元々オペラ教育からスタートいたしました。現在では声楽、器楽、作曲に加え、音楽芸術運営学科に音楽療法、バレエ、ミュージカル、アートマネジメント・舞台スタッフ等様々なコースが設置され、アーティストやクリエイターだけでなく、公演制作及び舞台製作など総合舞台芸術を担う人材の育成にも取り組んでいます。

この他にも麻生区役所・昭和音楽大学と共催の「こどもと一緒のコンサート」、「大人のためのコーラス教室」等にもプレルーディオは制作協力しております。

また、演奏会の制作だけでなく、劇場ホールの運営にも注力しています。麻生区にある「川崎市アートセンター」のアルテリオ小劇場（三四席）における事業制作と運営管理を指定管理者「川崎市文化財団グループ」の一員として行っています。加えて、二〇一七年十月開館の川崎市駅近くのカルツクかわさき（川崎市スポーツ文化総合センター）のホール（二〇三席）においても、

昭和音楽大学と共に指定管理者として舞台技術を担っています。

このカルツクかわさきでは、昨年十月に開館二周年を迎え、同月五日には「カルツクかわさき開館二周年記念事業」のちを歌うコンサート（主催：いのちを歌うコンサート実行委員会）が開催されました。

この実行委員会は麻生区文化協会はじめ、市内全区の文化協会と川崎市総合文化団体連絡会が中心となり、川崎市や文化財団、商工会議所等が加わり設立していただきました。市民が中心となり、文字通り産官民が手を取り合った、この非常に有意義な実行委員会に、プレルーディオも員として公演制作協力として加えて頂けたこと、そして、当日生憎の天気の中、夜にもかかわらず麻生区からも多くのお客様をお迎えし、盛況に催しを終えられたのは、皆様のご尽力を賜った結果であり、感謝の念に堪えません。

これからも麻生区文化協会の皆さまと一緒に、麻生区を中心とした「芸術のまちあさお」と、カルツクかわさきのある川崎市も含め「音楽のまちかわさき」の更なる発展のために尽力して参りたいと思いますので、引き続きご指導、ご鞭撻のほどお願いいたします。

また、演奏会の制作だけでなく、劇場ホールの運営にも注力しています。麻生区にある「川崎市アートセンター」のアルテリオ小劇場（三四席）における事業制作と運営管理を指定管理者「川崎市文化財団グループ」の一員として行っています。加えて、二〇一七年十月開館の川崎市駅近くのカルツクかわさき（川崎市スポーツ文化総合センター）のホール（二〇三席）においても、

また、演奏会の制作だけでなく、劇場ホールの運営にも注力しています。麻生区にある「川崎市アートセンター」のアルテリオ小劇場（三四席）における事業制作と運営管理を指定管理者「川崎市文化財団グループ」の一員として行っています。加えて、二〇一七年十月開館の川崎市駅近くのカルツクかわさき（川崎市スポーツ文化総合センター）のホール（二〇三席）においても、

学びのすばらしさ

～これまでの活動を通じて～

谷川みゆき

二年ほど前、山田流箏曲関連として麻生区文化協会への入会というご縁をいただきました。文化協会ではたくさんの方の先輩がパワフルに活動されており、その活動から、学ぶことが多く、まさに「生涯学習の時代」を肌で感じております。

「学び」が自分の心を育て、向上心が自分を磨き、そして何かの役に立つていく、そのようなことが人生のひとつの目的なのではと、最近とも思うようになりました。

この度、「現在までの活動について」文字にするという機会をいただきましたので、これまでどんなことを経験し、そこから何を学んだかをふりかえってみたいと思います。

子育てそして自分育て

一九八六年、長女が生後六カ月の時、夫の海外赴任が決まり、当時の西ドイツへ行くことになりました。次女、三女を現地で出産、一九九六年までの約十年間、ドイツの生活習慣と文化の中で生活しました。ドイツ

の人々は、異国の地に慣れない私たちに對して特別視することなく、時にやさしく、時に厳しく、接してくれました。そこで感じたのは、肌の色、生まれた国、使う言葉が違っても、同じ「ひと」であり、「違う」ということは決して悪いことではなく、卑下することでもないということでした。そして日本を離れ、外から見たからこそ感じたことは、日本文化の素晴らしさと、その根底に流れる日本人のやさしき、潔さ、志の高さ、和を重んじる心でした。

教育への関わり

帰国後子どもたちが小学校に転入し、成人委員として小学校のPTA活動にかかわることになりました。くじ引きで委員長を引き当て、委員会の運営に携わることになりました。当時の成人委員会の主な仕事は、家庭教育学級の企画運営で、その時の家庭教育学級では、「子どもを育てる親自身が、まず明るく元気でなければ!」というこ

とを念頭に活動しました。活動しながらあらためて気づかされたことは、「子どもは親の背中を見て育つ」「子どもは親をうつす鏡」ということでした。子どもが不安定な時は自分に心の余裕がないことが多い、子どもに「うしろささい!」「うしろだめ!」と言っているながら自分におきかえた時にそれができておらず反省し、と、まさに子育てを通して自分も成長させられました。

「時期、子どもとの模範にならねば」と高いものを求めるあまり、悩んだ時がありました。ちょうどその頃、麻生区PTA協議会の役員として活動させていただくことになり、同時に麻生区地域教育会議、川崎市PTA協議会、その他関係諸団体等との交流を通して色々な視点や考え方にふれることができました。

そのおかげもあり、子どもが一年生ならば親も一年生、気負わず、焦らず、でも努力は惜しまず、子どもと共に育つていこうと思うことができ、悩みに思い煩うことがなくなってきた。悩みも前向きにとらえることができるようになりました。

地域活動と生涯学習

麻生区PTA協議会役員を退いた頃、川崎市では区民会議が発足となりました。それにともない縁あつ

て、第一期、第二期の四年間、麻生区民会議の委員として、さまざまな分野から参画されている委員の皆様と一緒に活動させていただきました。区民会議の活動は、自分にとつては新しい「地域活動」という分野であり、それまでの学校、PTAなどの枠とは異なり、麻生区全体の子どもから大人までを対象とした視点での

活動でした。その活動の中で、他の委員の皆様のそれぞれのご経験、会議の運営や進行のしかた、いろいろな考え方などを見聞きすることができ、それまでにかかわることのなかった多くのことを学びました。また区民会議と並行して、麻生区地域教育会議の活動にも携わることになり、麻生区という視点での「地域活動」がどのようなものか少しずつ理解できるところになりました。

学びは人を豊かに

現在、麻生区文化協会、麻生区地域教育会議での活動や、学校のお琴の体験授業のお手伝いなどを通じて、子どもたちから人生の先輩までの年代も背景もさまざまな方々と交流できるおかげで、「いくつになっても学ぶことは多く、その学びは人を豊かにし、さらに興味関心をふくらませていくことができる」ということを実感しております。

この度、「現在までの活動」をふりかえる機会をいただいたおかげで、これまでの多くの経験と学びを何かに役立てていくことが学びを得た者の役割でもあると気づきかせていただきました。これからも「学び」を忘れず、多くの方々と心豊かに活動ができれば幸いです。



夏休み親子教室

カメラと人生

美術工芸部 千坂隆男

カメラとの出会い

昭和十三年の正月、陸軍の航空下士官だった叔父が満州で買ったというコダックのボックスカメラを持って現れた。目的は晴れ着姿の二人の姉であった。家族の写真を撮り写真屋に出した叔父は出来上がったネガと写真を大事そうに鞆にしまい、新しいフィルムを入れた写真機を私の手のひらにのせ「隆男ちゃんお年玉」と言った。私は舞い上がって喜んだが、そうそう普段使えるものではなかった。私のお小遣いでは、手が届かなかった。その上、戦争が激しくなると、カメラを下げて海や山に行くと、「何を撮っている。住所、氏名は？」と聞かれるようになった。

小学四年生になった私は昆虫採集に熱中し、神戸大丸で二人前の道具を揃え、神戸の裏山を真黒になって藪漕ぎをしていた。モンキアゲハの標本を五体制作し、躍英雄となった。時間を明け麓から多井野畑村の方角へ飛んでいく真つ黒な掌大の蝶の道は、先生にも話さない秘密であった。

昭和二十年六月三日、紀伊水道から侵入したB29の大編隊に油と爆弾をばらまかれ神戸の町は壊滅した。

私の宝物、カメラも標本も全てが灰になった。姉が縫ってくれた防空頭巾も綿が半分飛んでいた。

空き腹抱えた山歩き

父親の出里である愛媛に逃げ帰り西條中学に行った。校長が証明書はと問うと母親は、「火の中を逃げてきたのです。これが証明書です。」と、私のよれよれの帽子を出した。子を守る親の強さをつよく感じた。籍を入れても授業はなく山で穴掘りだ。

八月十五日、重大放送を聞いた。「あ、死ななくていいんだ。」只それだけだった。授業が始まったのは十月半ばである。中学三年になると授業もまともになりクラブも開かれた。ゴラスと登山に入った。写真を提案したが、暗室はあつてもフィルムと薬品がなく立ち消えになった。

四国山脈を二泊といつても公民館や小学校の板の間に泊まり空き腹を抱えて歩いた。銅山嶺・明石山脈・笹が峯・平家平等々。カメラを持ってきているやつが恨めしかった。親友の君はミノルタを駆使して夏休み桜井の浜でアルバイトをし、学費を稼いでいた。私はカメラがないので肉体労働で稼ぎ大学へ行く

た。授業料免除と奨学金でやっと卒業できた。

就職したら記録係

小学校の教員になった。秋の運動会で用具係をしながら、借り物のカメラでスナップを撮った。プリントしたものを教頭に見せると「これは良い、学校で金は出すから君は記録係だ。」アルバムは校長室の戸棚に「秋季大運動会昭和二十六年度」背表紙をつけ納められた。

結婚して二年目、初めて妻にねだつた。「カメラが欲しい。」二つ返事で金を出してくれた。嬉しかった。アサヒフレックス国産初の眼レフカメラだ。店主が「大阪で二台仕入れてきました。松山とうちだけです。」と値引きに応じなかった。このカメラは今も私の書架に鎮座している。

一家の都合で川崎に転じた。やはり記録係だ。学校給食で文部大臣賞をもらうため報告書を書けといわれ、子供の活動を中心に百五十ページほどの文書をまとめた。勿論子供の写真は生き生きとした表情でたっぷり入れた。そのせいで、県の代表として米子大会に行かされた。何で私は横道に行くんだろう。私が番勉強したいのは歴史なのに。写真は記録としては優れた手法だ。だが生きた子供を撮るのは芸術だ。

文化協会と写真

平成四年三月、四十一年間勤めた教職も定年退職。川崎市生涯学習事業団に移る。



写遊会場

アルテリツカ美術展

麻生で芸術のお祭りをしようという話が持ち上がった。五月の連休に新百合ヶ丘の各施設を中心に、映画演劇音楽の祭典が企画された。文化協会としては美術が欠けていることを指摘し、美術展の挿入を主張し入れられた。

あさお写遊会の創立と写真展

スマートフォンの普及で写真は誰でも撮れるものになった。観光地へ行くと大勢の人が撮っている。それに反して塾やサークルは人が集まらない。

小田島さんから、サークルを創りましょうと声がかかった。そこで「あさお写遊会」が出来た。麻生区文化協会の「あさお古風七草粥の会」に花を添えるよう一月七日に写真展をやりたい。

(写真提供 小田島寛)



反省会

「文化講演会」喫茶文化で識る世界の歴史

講師 東京都大学名誉教授 平本一雄先生

麻生区文化協会アカデミー部が主催する「文化講演会」が三月九日（土）に麻生文化センター大会議室で、講師として平本一雄先生をお迎えして開催された。私たちが毎日いただいているコーヒー、茶の歴史とこれらのお茶がもたらした文化について大変興味深いお話を聞くことができた。

講演の概要

(1) 基礎知識として

●コーヒーの原産地はアフリカ大陸で、十三世紀にエチオピア帝国によりイエメンにコーヒーの木が持ち込まれた。十五世紀になってイエメンのモカ、アデン、メッカにコーヒーが伝わり、メッカの巡礼者がコーヒーを土産に持ち帰ったことから全イスラム世界に伝わったことが全世界に広がったとのことである。その頃、メッカではカ

フェハネと呼ばれる現在のコーヒーハウスが市内のあちこちに誕生し、市民の交流の場となっていく。コーヒーによるサロン文化が栄えていった。

●また、茶は中国が発祥の地で、紀元前二七〇〇年頃から長い間葉草として栽培されていたものが茶の始まりと言われている。三国志時代（二四二～二八三）に茶の発祥の地である雲南省から四川省に伝わり、その後、日本へは遣唐使が持ち帰ったと言われている。茶を世界に伝えたのは十三世紀のフビライの元の帝国である。日本では室町時代の將軍足利義政の治世の頃、茶の湯が始まり、十六世紀後半の秀吉の時代に千利休によって茶の湯が全盛期を迎えることになる。

●イギリスでは十七世紀中頃にはロンドンでコーヒーハウスが爆発的に流行し、あらゆる階層の人々が貧富の差もなく入店でき、コーヒーハウスが市民社会の交流の場になるほどコーヒーの人気が高かった。しかし十八世紀初頭になると、茶の輸入量が急激に増加し、それが中産階級にも普及し、それまで全盛を誇っていたコーヒーハウスが減少し始め、十八世紀中頃になると、茶を八十%以上発酵

させた紅茶に人気が高まり、茶の消費量の三分の二は紅茶が占めるようになった。

●二〇一三年の年間生産量はコーヒー豆が約八九二万トンで、茶の年間生産量は五三三万トンである。

●現在の年間生産量ランキングではコーヒーがブラジル、ベトナム、インドネシアの順で、茶は中国、インド、ケニアの順である。

(2) 世界の歴史とコーヒー、紅茶の歴史との関係

紅茶の歴史との関係

●前述のように、エチオピアからもたらされたコーヒーはメッカへの巡礼者によって全イスラム世界に伝わったのであるが、それがオスマントルコ、ペルシャ、インドへと伝わって行き、一五〇〇年代のポルトガル、スペインの大航海時代に世界中にもたらされたわけである。

●そして二六〇〇年にはローマ教皇が、キリスト教徒がコーヒーを飲むすることを許可したことがコーヒーの需要増につながったと言われている。

●そのような経過をたどり、一七〇〇年代にはヨーロッパの各地でコーヒーが栽培されるようになっていった。

●十七世紀中頃まではロンドンのコーヒーハウスが大流行したのであるが、二六六〇年にキャサリン王女の嫁入り道具の一つとして、身を守る万病に効く東洋の神秘薬である茶を持参したことから英国宮廷に喫茶ブームが起り、十八世紀初頭のアン王女の時代にはイギリスで茶が大流行することになったのである。

●コーヒーについて言えば、十八世紀の初頭にオランダの東インド会社が植民地コーヒーを誕生させ、一七二〇年にはヴェネチアでカフェフロリアンが生まれ、一七六〇年にはローマでカフェグレコが開業し、一七八八年にはパリでは一八〇〇軒のカフェが栄えた。そして、そこが啓蒙思想家の体制批判の場となり、フランス革命へとつながっていくのである。

●十八世紀終わり頃にはナポレオンがコーヒー生産を増大させていくことが、中南米の砂糖生産をコーヒー生産に変えることにつながっていくのである。

●一七七〇年代から始まったイギリスの産業革命による蒸気船の普及が輸送革命につながり、ブラジルを中心として大量に生産されたコーヒーは短時間で世界中に運搬されることが可能になり、現在の世界中での大量消費につながっている。

●紅茶について言えば、一八四〇年頃から始まったイギリスでのアフタヌーンティーが上流階級でも広まり、

一八五〇年以降はインドのアッサム地方でも茶の栽培が始まったことから紅茶がイギリスの国民的飲料になっていくのである。

●一八七二年にリプトンがセイロンの茶園を買収し、茶の低価格化をすすめた。これにより茶が貧困層や植民地労働者へも普及していった。

●一八二二年にはブラジルで黒人奴隷によるプランテーションでの大農園方式でコーヒーの大量生産が始まった。当時、黒人奴隷の数はブラジルで四八〇万人、カリブ海沿岸諸国で二八〇万人いたとも言われている。

●第二次世界大戦のときにヨーロッパ戦線での米軍兵士にインスタントコーヒーが支給された。これが現在のティーバッグや缶入りにもつながっているとと言える。

といった概要で、休憩をはさんで約九〇分間の講演であったが、もっとお話の続きをお聴きしたいという思いを持たせていただいた講演であった。

（岩田輝夫）



今年度

受賞者の紹介

元号が「平成」から「令和」へと改元される二〇一九年度総会において、麻生区の文化・芸術の活動に尽力された次の三氏が表彰されました。

●麻生文化祭奨励賞

上田隆義様

麻生区文化協会舞台芸能部に所属され、本会主要事業である文化祭の邦舞邦楽の舞台の企画運営に携わり、麻生区文化祭の振興に尽力されてきました。対外的にも麻生区邦楽祭に出演され、斬新な芸風で観客を魅了しておられます。

また、麻生区文化協会の「夏休み親子教室」では子どもたちの指導をわかりやすく、熱心に取り組み、保護者から高く評価されています。伝統ある沢村流の家元として麻生区内外に稽古場を構え、麻生日舞協会の代表として「日本舞踊は、自分の心・身体・技術で日本の『心』を表現する舞台芸能である」との信念を持って邦舞を志す後進の指導にあたっておられます。

●麻生文化祭奨励賞

関森田鶴子様

麻生区文化協会のアカデミー部に所属し、俳句講座、および、本会主要事業である文化祭の俳句大会の企画運営に携わると共に選者としてもその高い見識をもって文化振興に貢献されました。

また、平成十三年入会以来、会報「からむし」の編集に携わり、平成二十三年度からは編集委員長の重責を担い、本会の活動を会員に伝えるためのご努力をされてこられました。また、平成二十五年から二十九年度にわたり文化協会役員（会計担当）として本会の運営にも尽力していただきました。
※麻生文化祭奨励賞は川崎市長より授与されました。

●麻生区文化振興賞

倉田理貴様

麻生区文化協会の美術工芸部に所属し、麻生いけばな協会をまとめ「夏休み親子教室」の指導や、文化祭への展示をはじめ、「アルテリッカしんゆり美術展」では、流派を超越しての大作は高く評価されております。

また、永年にわたる公的施設への生花展示の奉仕やアゼリアサンライト広場で開催された川崎花展においては、桐光学園の生徒たちに日頃よりの質の高い指導をされて来られた結果が見事に「川崎市議会議長賞」に輝くなど、その実績や指導力が高く評価され、地域文化の向上や振興に多大な貢献をされました。
※麻生区文化振興賞は麻生区文化協会会長より賞状及び副賞が授与されました。
(橋本周)



果が見事に「川崎市議会議長賞」に輝くなど、その実績や指導力が高く評価され、地域文化の向上や振興に多大な貢献をされました。
※麻生区文化振興賞は麻生区文化協会会長より賞状及び副賞が授与されました。
(橋本周)

第三十五回

かわさき市民芸術祭美術展

第三十五回かわさき市民芸術祭美術部門展が平成三十二年二月十九日(火)～二十四日(日)の六日間アートガーデンかわさきで開催されました。会場のあるタワーリパークは、川崎駅北口直結です。

主催は、川崎市総合文化団体連絡会(総文連)です。総文連には、川崎文化会議、川崎市文化協会、川崎文化協会、幸区文化協会、中原区文化協会、高津区文化協会、宮前区文化協会、多摩区文化協会、麻生区文化協会の九団体が所属しています。



この展覧会は、各団体から推薦された実行委員によって運営されており、麻生区からは、山本絢子さんと筆者が実行委員として絵画の展示と広報を担当し、DMはがき、パンフレットの作成・印刷、およびメディア広報を分担しました。

本展覧会においては、総文連所属の各団体の会員による絵画、写真、手工芸、フラワーデザイン、書、詩歌、茶道、華道各ジャンルの作品が展示されました。

麻生区は、文化祭に出品した絵画七点、書五点、手工芸三点、写真五点を出品しました



かわさき市民芸術祭美術展風景(麻生区)



お点前風景

この美術展の特徴は、最終日のおぞく毎日、茶道家によるお点前があることです。お茶を頂いた後、ゆったりとした気分で作品を鑑賞できると好評です。

華道は、アルテリッカ美術展のような合作ではなく、二人ずつ大作を展示しており、前後期の入れ替えがあります。麻生区は参加していません。また、この展覧会では、詩歌の短冊の展示、フラワーデザインの展示があります。これらは麻生区文化協会の美術工芸展にはないものです。

期間中約二〇〇人の皆様にご来場いただき盛会裏に終了しました。川崎市において北部に位置する麻生区文化協会は、中部・南部の文化団体と交流する場がほとんどないので、この美術展の開催を通じて知り合いたたくさんの仲間は、貴重な財産だと思つていきます。

(佐藤勝昭)

平成最後のアルテリツカ新ゆり美術展うら話

新百合トウエンティワンホールにて三月四日から十日まで開催されました。この美術展は今年で十二年を迎え、入場者数は千五百人を超えていました。

麻生区美術家協会の絵画・彫刻・工芸二十二名、麻生区文化協会のいけばの合作(麻生いけばな協会所属)二十名、書五名、陶芸四名、絵画四名、写真五名、文化協会主催のデッサン会十三名、特別展示の高校生油彩：三名が展示されました。今年もプロ・アマそれぞれに力作ぞろいでした。



作品の搬入は前日の三日、朝九時から始まりました。平面作品は自分で持ち込みますが、大きな作品は業者に頼みます。陶芸作品や彫刻作品は車で各自が運んでいます。それぞれの分野の展示場所は、既に決まっていますのでスムーズに進みます。スムーズに進む理由は、実行委員会が編成され、実行委員長、各分野の代表者、ホール裏方の方々が三回にわたりポスターやちらし作成から作品数やパネルの数、照明、キャプション等話し合っているからなのです。しかし、事前に打ち合わせをしても搬入時に作品をから創るといふ大変な分野があります。それは麻生いけば

な協会所属の二十名の先生方の合作です。実際は事前に組み立てなどをリハーサルするのですが。

他の流派と協力しながら展覧会のためのテーマを思い描いて創造していくのです。それは多分、相当なストレスがかかる仕事ではないでしょうか。しかし七つの流派が共創してその中から新しいものが創造されるのは麻生区ならではの姿です。

市の総文連でもいけばの展示があり、ますが個々の流派での展示にとどまっています。



今年のテーマは「薫る風 土に光を」でした。見えない風を竹で表現したダイナミックな作品でした。出品者は、搬入日の翌日から順番で受付に座りまゝ。他の分野の方たちとおしゃべりは、新鮮な刺激になります。自分と違う視点からの感想をいただいたり、相手の技術の難しさを知る機会となるのはかけがいのない



時間です。

新しい「令和」という年の、アルテリツカ美術展に向かつて、希望がふくらみます。(小田島紀美)

総会報告

麻生区文化協会二〇一九年度総会が、四月二〇日(土)午後二時から区役所第二会議室で開催されました。

議事に先立って昭和音大生のスピネルサキソフォンカルテットによる演奏があり、会場の出席者を和ませました。

菅原敬子会長は主催者挨拶の中で、今年度の本会の活動について次の六つの方針で活動を行うと述べました。

①今年三十五周年を迎えるにあたり、全ての事業や活動に「三十五周年」を冠に付けてほしい。

②二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックが十ヶ月後に迫った。麻生区にお住まいの七十四カ国二六四三名の外国人に日本の文化に親しんでいただけの場作りを考えていきたい。

③三月に区が開催した「麻生区多文化フェスタ」に文化協会会員が茶道で協力したが、他の団体の企画事業にも積極的に協力したい。

④麻生区文化協会の諸活動のレベルの高さは高く評価されて



いるので、今後の事業活動にこのレベルでの取り組みをお願いしたい。

⑤麻生区のみならず文化協会のかかえている問題は「高齢化」である。若い方の入会は困難でもせめて催しに来ていただく、見ていただくことにより、文化協会の活動を知って頂く取り組みをしたい。

⑥五月一日に令和元年が始まるが、今後は西暦を基本として和暦での表記は〇付で表示ようにしたい。

このあと、表彰式が行われ、川崎市長の代理で多田貴栄区長から、上田隆義(沢村一寿)さんと、関森田鶴子さんに麻生区文化祭奨励賞が授与され、菅原会長から田中貴美子(倉田理貴)さんに麻生区文化振興賞が授与されました。

(七ページ参照) 来賓の挨拶のあと、議事に移り、二〇一八年度の事業報告および二〇一八年度決算報告、監査報告が行われ、いずれも拍手で承認されました。また、二〇一九年度事業計画と二〇一九年度予算が提案され、拍手で承認されました。

(佐藤勝昭)

文化協会のこれから

舞台衣装の女優さんを描くデッサン会
七月十四日(日)麻生市民館大会議室
夏休み親子教室
七月二十五日(八)八月八日麻生市民館他
麻生区文化祭

九月二十日(日)文化サロン大会議室
十月六日(日)麻生フィルホール
十月十八日(金)二十三(水)

美術工芸展／俳句展示
ギャラリー・オープンスペース

十一月二日(土) 邦舞邦楽 ホール
吟舞吟詠大会議室
十一月三日(日) 洋舞 ホール
俳句大会 大会議室

編集後記

令和へと改元される記念すべき月のからむし六十六号の発行である。新たな元号「令和」が発表された翌日の読売新聞の編集手帳では、令和は人々が心を寄せ合って「好(よき)、やわらかな世」を作っていく理想は世界一円に通じる国際性を宿していると論じていた。

さて、本会も三十五周年の節目の年である。新しい風と創造の理念が活動を通して具現化していくことが望まれる。新たな知恵や創造を織り成す事業展開や会員が創り出す個性豊かな芸術・文化など大いに期待される。そうした状況を如何にからむしに反映させていくか、編纂に当たっては心あらたに取り組み覚悟が求められる。

(橋本周)

編集委員
岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報
からむし 第六十六号
令和元年五月一日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会広報部
川崎市麻生区万福寺一五一一
麻生文化センター内
〇四四一九五一―三〇〇
印刷 (株)エリアブレイン